

## 氣候馴化論の学史的背景

——十九世紀末葉に於ける当論研究の目的——

和田 俊 二

【梗概】氣候馴化論の学史的背景は凡そ三時期を劃して考へられる。第一期は十九世紀中葉で氣候馴化てふ語辭とその研究が仏國で創始され専らアルゼリア植民政策の具とされた。第二期は本稿に取扱ふ十九世紀末葉に屬する。マルサスのエビゴーネン達は歐洲過剰人口を熱帯に指向けんとして当論研究を要請し、又時代思潮たる帝國主義下に実現した世界勢力均衡への脅威を氣候馴化能力に秀でたる蒙古民族の素質に見出す時、黃禍論の展開が見られ、歐洲民族の中にかかる素質者を假想する時、アフリカは勢力均衡の支撐点と迄考へられるに到つた。歐洲の世界的膨脹が歐洲民族の氣候馴化能力を考慮せざる政治經濟的基底に立つものであつたが故である。かかる交に於いて当論研究が真摯に取上げられた。第三期は第一次世界大戰後に屬し世界人に收容力及び世界食糧問題の渦巻く中には既に見た。

### 序言——対象文献と問題の所在

ここでは氣候馴化論それ自体の学史的展開に再び触れようとするのではない。<sup>①</sup>専ら当論研究が何らかの政治的經濟的乃至は社会的要請に基いて為されたのではないかという

殆んど否み難い事実の上に立つて、かゝる要請に照応して氣候馴化論研究が遂行せられた所の目的意識の具象的把握を為そうとする。云わばかゝる歴史的研究は新しき氣候馴化論研究の目的意識設定の出発点でなければならぬ。吾々は当論研究の跡を回顧する時に、「氣候馴化」てふ語辭

が仏蘭西で創始され、当論の科学的研究も亦仏蘭西に於て先鞭がつけられたことを既に見た。<sup>②</sup> いまこれを当論研究の第一期とするならば、これに続く十九世紀末葉という一時期を劃して当論研究の第二期が考えられてよいであらう。なぜならばこの時期を特徴する明確なる一つの目的意識の存在するのを見出すことが出来るからである。而してそれを吾々はリプリーの著に見出すのである。

リプリー William Z. Ripley の氣候馴化論は彼の著なる The Races of Europe : A Sociological Study, 624p. London 1899 の最終章として収められたる Chap. XXI Acclimatization: The Geographical Future of the European Races (op. cit., pp. 560—596) がそれである。吾々が本書を特に茲に取上げた所以はトレローサの言葉を藉りて云うならば「一八九九年刊行せられたる著 The Races of Europe に於いてリプリーはその時代以前の氣候馴化論に関する諸文献を見事徹底せる方法を以て評論した」ところに存する。

併し乍ら彼の氣候馴化論の評論は歐人の熱帯氣候馴化の

成否の問題、換言すれば氣候馴化論の本質理論に関する問題にその評論の重点を置いてるのであり、吾々が茲で取扱う氣候馴化論研究の目的意識に関する問題は彼の評論の本体と為すところではないと雖も、なお彼が本論の冒頭に掲げおる「熱帯諸國に適用される氣候順応 climatic adaptation の問題の關係並に意義」という一節はまさに彼の時代の当論研究の目的意識の表明に外ならない。

曰く「(i) 今日歐人が開拓せる土地の六倍の肥沃な土地が過剰人口を吸収すべく待つてゐる。併し乍ら貿易者及び土民の監督者はその地に棲む事の可能な唯一の植民者であるならば、忽ちにして飽和点が到来することは自明である。(ii) 加うるに氣候馴化論の問題は大なる政治的重要性を有している。今若し歐洲諸國民のうち、何れか一國民が熱帯移民の危機に直面して特別な生理的免疫性を有するとせば勢力均衡は大きいに乱されるかもしれない。(iii) 然りとせずんば、熱帯に植民せんとする歐人の薄弱な試みに對する大なる脅威は、新しい氣候状態に適應する力に於いてすべての民族の中でも最大能力を有せる大衆古民族の卓絶

せる素質に存するかもしれない。(iv)今やアフリカ並にポ  
リネシア及び世界の大部分は歐洲諸国民の間に分割を了し  
ている。探検家がその事業を終了している以上は、果して  
歐人はこれらの土地を如何に取扱うことが出来るであろう  
か。】(文中の数字は和田による)

(i)は歐洲の過剰人口問題対策としての氣候馴化論を意  
味し、(ii)(iii)は氣候馴化論の有する政治的意義であり、  
そのうち(ii)は歐洲の政治勢力均衡に關聯し、(iii)は東亞  
に關聯して黃禍論へと展開される起因を表しており、(iv)  
は帝國主義的植民地獲得運動に關聯する問題と理解する限  
り(ii)と同一問題のうちに取扱われ得ると考えられるし、  
又歐洲の勢力均衡を脅かす可能性を呈示する場所的問題を  
も表している。

こうしたリプリーの問題提示のうちに、彼の当論研究の  
目的意識が表明されているとするならば、吾々は彼の問題  
提示が果していかなる歴史的背景より生起しているのであ  
るかを糺すことによつて、而して更にリプリーの問題提示  
それ自体が十九世紀末葉の時代的風潮の中に普遍性をもつ

かどうかを論証することによつて、初めて十九世紀末葉に  
於ける氣候馴化論の学史的背景が明かとなると考へるので  
ある。

註① 拙稿 氣候馴化論の学史的考察 彦根論叢(彦根高商  
論叢改題)創刊号 昭和二十四年十二月

② 拙稿 氣候馴化論の学史的背景(一)——仏蘭西の当論創始と  
その目的 彦根論叢 第二号 昭和二十五年六月

③ Glenn T. Trewartha: Recent Thought on the Problem  
of White Acclimatization in the Wet Tropics, Geogra-  
phical Review Vol. 16, 1926, p. 467.

④ William Z. Ripley: The Races of Europe: A Sociolog-  
ical Study, London 1899, p. 561.

## 第一章 歐洲の過剰人口問題

リプリーの過剰人口観を以てするとき、歐人にして貿易  
者及び土民の監督者が唯一の熱帯植民地であるとすれば、  
温帯的歐洲の人口飽和点は忽ちにして到来するであろうと  
彼は観じた。かゝる人口過剰観は十九世紀末葉の歐洲の世  
人が何人と雖も懐いていた通念であつたらうか。このこと

は十九世紀末葉の歐洲の人口状態並に人口論が如何なる趨勢にあつたかを見れば明かとなるであろう。

史家はいう、十九世紀は西洋文化の世界に於いて史上特に人口増加の顯著な時代であつたと。人口史家として著名なペロホの推算<sup>①</sup>によれば、十九世紀初の白人種の総数は約一億七千万であり、その大部分が歐洲に居住し、他の大陸に於ける彼らの数は殆んど云うに足りない。然るに十九世紀間に白人種の数は約五億一千五百万に増加した。その中チュートン系が一億一千万、ラテン系が一億六千五百万、スラブ系が一億四千万を数え全体として正に三倍の増加である。而して白人種の増加が遙かに他の諸人種を凌いでいたことは推定に難くない所である。<sup>②</sup>

他人種の増加に対し、白人種の増加がこれを凌駕した十九世紀の歐洲人口増加の趨勢を、この世紀を前半と後半とに分けて考えてみると、兩者を特徴づける二つの人口現象がある。即ち前半には前世紀に比して歐洲各国に人口の急速な増加を見て、まさにマルサス理論が支配的であつた。然るに後半には年々夥しく増加は見られただけでも出生率

が減退し始めたことである。人口問題もマルサス理論より一転回を為し、後半にはマルサスの人口過剩説は自然と人智とに対する冒瀆であるとの論が多く行われるに至つた。

云う迄もなく産業革命の後に来る資本主義高度の發展の結果であつた。資本の蓄積は巨大となり、富の生産は未曾有に進み、マルサスが云いし所よりも、生活資料はより速かに、人口はより緩漫に増加すると考えられた。けれどもこうして齎らされた前説の如き歐洲の未曾有の人口増加は主として無産階級に属し、富は蓄積されたが同時にその対極として下層階級の人口も堆積した。かくて人口問題は社会的貧困の問題として世人の注目を惹くに至つた。而して救貧対策が人口問題の中心主題となり、この対策に関してマルサス理論に二つの反対説が起つた。即ち新マルサス主義とマルクス人口理論とがそれである。<sup>③</sup>

十九世紀後半の歐洲に於いて人口問題がかくの如く貧民問題として取上げられる所にも歐洲の過剩人口の存在を見る事が出来る。たとえマルサス理論が救貧対策として人口増殖に関する個人の道德的自制に訴えんとするのに反対

して、上記の二説が唱えられるとしても、人口増殖の事實に關する限りマルサス理論はいつの世にもまた真理である。實際マルクス自身はマルサスの人口増殖と食物増加の問題には何ら触れるところがない。要するに当時の人口問題は貧困、貧民問題として取上げられる趨勢にあつた。而してその起因を為すものは現実の絶対数の増加にあつた。而して絶対数の増加は人口問題の把握の方法をこれとは異にした一つの問題を呈示した。それは人口問題を絶対数増加との關聯に於いて同じく考究はするが、把握の方法が救貧問題に比して一層素朴な形態たるところの人口食糧問題であり、云う迄もなくマルサス理論の一層忠実な継承であつた。リプレーは当時歐洲に於ける人口自然増加の著大なるを直視しつゝ、片や人口問題が救貧問題として展開されなければならぬ過剩人口の世態を窺ひつゝ、彼の人口問題觀もまた忠実なるマルサス理論のエピゴーンの一人として歐洲の將來人口への脅威の念を彼の心底に蟠据せしめていたに相違ない。彼の「溫帶的歐洲の人口飽和点」に對する脅威の發現が茲に認めらるべき理由が存すると思ふのである。

彼はこれが対策として移民という型式を採択せんとして、且つはその対象地域を世界未開地たる熱帯へ指向せんとするところに、氣候馴化論研究が要請されようとする。リプレーは歐人の熱帯移住に對し否定的前提を提示しつゝ、果して然るかの問題が彼の氣候馴化論に於いて展開されているのである。

吾々は人口問題の観点より氣候馴化論研究が要請されるべきところを見たが、この人口問題の当期に於ける特徴としては既に見た通り歐人種の他人種を凌駕する急速なる増加が歐洲に過剩人口を齎し、これが対策の一つとしての移植民問題の科學的原理たらしむべく当期の氣候馴化論研究が要請せられたのである。然るにこれが世界的規模に於ける過剩人口問題換言すれば世界人口収容力の可能性を高めしめんとする対策として當論研究が要請されるのは第一次世界大戰後に屬する。

註① Beloch: Die Volkszahl als Faktor und Gradmesser der historischen Entwicklung, Historische Zeitschrift, 1913.

② 今井登志喜「十九世紀に於ける人口増加について」史學雜誌

## 第二章 氣候馴化能力の民族的差異と

## 國際關係

リプリーの提示せる(ii)(iii)の二問題(序言参照)は之を要するに氣候馴化能力の民族的差異と國際關係の問題に歸することが出来る。即ち歐洲民族のうちに氣候馴化能力に卓絶せるものの出現を假想乃至は憶測するところより出でて、勢力均衡への政治的脅威なりとするならば、吾々は先ず勢力均衡の実態を把握して置く必要がある。

いまリプリーのいう勢力均衡が如何なる意義をもつかは極めて重要な問題である。それはリプリーの勢力均衡がただ歐洲的勢力均衡ではないということである。なぜならば十九世紀末葉を彩る最大の時代思潮は「帝國主義」であつた。歴史的時代概念としての「帝國主義」は厳密には一八七〇年代にその誕生を見た。この帝國主義は世界史の上に如何に展開されたかを考える時に、リプリーのいう十九世

紀末葉に於ける勢力均衡は、正確には世界勢力均衡でなければならぬ。

それは十九世紀末葉は正に全世界の一体化の實現、全世界事象關聯性の創出があつた時代であるからである。この時代、歐洲列強が單にあつてもなくともよいような冒險的乃至は通商的關係ではなしに、夫々自國の發展と運命とを左右するような、更に國家存在そのものを賭して争わねばならぬような死活的關係をば、地球上のあらゆる部分に有するに至つた。かゝる状態にまでこの時期に歐洲の膨脹が為されたのであり、かゝる膨脹は従前に於けるそれから本質的に區別されなければならない。かゝる死活的關係をば歐洲列強が東亞の世界に有するに至つた時、そこに吾々は全地球上への歐洲の拡大現象の完了、歐洲の膨脹を媒介とする全世界の一体化の實現を見出すことが出来る。史家は Das europäische Statensystem の普遍的拡大秩序としての世界國家系 Weltstatensystem の成立を認めようとする。

だからリプリーのいう勢力均衡は歐洲的なそれではなく

て、世界的勢力均衡であると理解すべき理由が存するのであり、かく解することによつて初めて黃禍論(序言(iii))参照)並びにアフリカ大陸の問題(序言(iv)参照)。尙アフリカ問題第三章に於て究明せられる。)がその正しき意義を發現して来るのである。

而して世界国家系が如何なる手段を通じて成立したか、その手段が政治的経済的であつたか血液的であつたかの問題は(iii)(iv)の問題を究明する上にも必要となつて来る。

歴史現象のうちに見られる世界国家系は歐洲の資本輸出を唯一の手段として成立を見たことには異論はない筈である。吾々は茲に想う、なぜそれは血液的なるもの、即ち人口移動という形式に於いて成立しなかつたのか、或いは又両者が並行する形式に於いて成立しなかつたのか。

吾々は資本に対する血液的なるものという表現を用いて来た。いまこれらを資本と労働という二つの概念に置き換えて考へてみる事が出来るとすれば、両者の國際的移動の上に相互因果關係が認められることは經驗に基礎づけられた歸結なのである。それは場所的に互に引離されている資本

群及び労働群は相互に他を引付ける傾向を有つてゐる。即ち自ら互に相近ずこうとする。資本が労働に近ずかんとする自然的傾向を生具しているのは蓋し之と共に在ることによつて資本自身の限界収益が高められるからであり、同じ理由から労働も亦資本の豊富な場所を求めんとする自然的示唆を有つてゐる。③。事実、今世紀の初頭まで資本と労働とは多くの場合手を携へて海外新領土へ移動したのである。

この現象は資本と労働の両移動そのものの間に相互因果關係が存することに起因するものに外ならない。資本のみが移動すれば、その流入國に於いてはこれがために、増大せる資本準備の爲にも亦この國の天恵の新発見の爲にも労働の限界生産力が高まり、かくてこの國への労働移動に対して二重の刺激が生ずることとなる。④。

而して資本が輸出されるのは資本の高度蓄積が資本過剰を惹起するからであり、このことはまた恐慌によつて過剰の労働人口を生じるのである。而して歐洲資本主義社会にあつて当時過剰人口の問題が高唱せられたことは第一章に見たところであり、それが対策として移民が論ぜられ、又

アメリカ大陸への歐洲移民には後年殆んど完全とも云うべき禁止令が施行せられるが、当時にあつては尙盛況を呈しつつあつたことを想うならば、世界國家系成立の手段が血液的たり得なかつた根本理由を、限度ある歐洲人口數に帰せんとする前に、吾々は現今ラテン・アメリカ共和国のいづれに於いても支配階級となつてゐる者は *Mestizo* (歐人とインデアン人の雜種) であり、又南米大陸低地及び西印度に於いて *Mulatto* (歐人と黑人との雜種) は重要な存在となつており、<sup>⑤</sup>而してこの兩雜種はいずれも人口數に於いて極めて限度あるイベリア民族の移住によつて惹起されたものに外ならないし、フィリッピンも亦これと軌を一にして生誕したことを留意すべきである。次に資本は國境を越えて行く容易さがあるとはいへ、血液も亦当時にあつては *レッセ・フェーア* に移民として國境を越え得る容易さを有してゐた、<sup>⑥</sup>労働の國際的移住權も未だ何らの制限を蒙つていなかつた時代であることを想うべきである。

それにも拘らず歐洲の全世界的膨脹が上記の若干の地域を除いては血液的たり得なかつた理由は何か。それは歐洲

外的世界にあつて歐人の移住に適した植民地を有してゐる國家は英國と露西亞を除いてはないとブランデンブルグは云う。<sup>⑥</sup>このことは植民史家の所謂「移住植民地」が僅かに加奈陀と藻洲・新西蘭と南阿とアジアに於ける露領であることを意味し、これ以外の場所に於いては歐人の移住に適せる植民地を有する國家はないという事を意味する。云うまでもなくアメリカと南米共和国は既に歐洲支配から離脱してゐるからである。従つて英領と露領以外の植民地にあつては風土との闘いが存在することは事實である。歐洲の膨脹がその支配するすべての地域に対して血液的たり得ざる根本理由は地理的、風土的制約である場合が極めて多いのであり、吾々のいう氣候馴化能力に關聯して初めて解し得る問題がより重要な地位を占めるのである。

歐洲の膨脹が風土との闘いが存在する地域に於いては、これが闘争を回避して、茲に専ら資本輸出を唯一の手段として實現された。かくして成立を見た世界國家系の勢力均衡はいかにして保持せられるか、それを脅威するものは何か——この問題は世界國家系成立という劃時代的な歴史事



象にも拘らず、その成立と同時に附纏う深刻な問題であつたと思われる。いう迄もなくその成立が政治的経済的であり、血液的たり得なかつたが故に、今若し血液的たり得る者、換言すれば氣候馴化能力に秀でたるものの出現あらば、その時こそ世界的勢力均衡を脅威するものだと云われる所以がそこにある。

リプレーの提示する問題(③)は氣候馴化能力の秀でた者を歐洲民族のうちに仮想した場合であり、問題(④)はこれを蒙古民族の素質に見出そうとする場合である。彼は蒙古民族の卓絶せる氣候馴化能力への関心は一八七六年刊行のラツェルの所論<sup>⑤</sup>に拠るものであることを記しているが、一八九六年には独乙皇帝ウイヘルム二世による「黄禍」の流言の源泉となりし日清戦争が終結していることも併せて考えるならばリプレーの書の刊行を見た一八九九年当時の歐洲に於いて黄禍は全世界的勢力均衡にも影響ある事象として世人の注視を集めたことが首肯出来る。要するに当期の氣候馴化論の研究はかくの如き政治経済的な問題に深き関聯をもつていたのである。

註① 中山治一「二つの國家系」西洋史研究 第一輯 四〇四頁以下

② Ragner Nurkse : Internationale Kapitalbewegungen. 1935.

③ 前掲書 三一頁

④ A. G. Price : White Settlers in the Tropics, N. Y. 1933, p. 18.

⑤ 拙稿「氣候馴化論の学史的背景」(三)——第一次大戦後に於ける当論研究の目的 地理学評論二十三卷九・一〇合併号

⑥ Erich Brandenburg : Europa und die Welt, 1933. (西村貞二訳) 一四九頁

⑦ Friedrich Ratzel: Kolonization, Breslau 1876, quoted by Ripley, op. cit., p. 561.

⑧ The Races of Europe: A Sociological Study, 624p London 1899.

Chap. XXI Acclimatization: The Geographical Future of the European Races (Op. cit., pp. 563-593)

### 第三章 世界的勢力均衡とその支撐<sup>支</sup>点

十九世紀末葉の世界的勢力均衡が懸つて氣候馴化の事象に存することを前章に見た。かゝる勢力均衡は何処かの地点をその支撐点として保たれることであろう。かゝる地点

は支撐点なるが故に均衡維持の上には極めて繊細な感点を形成する筈である。果してこの支撐点を吾々は何処に求めようとするか。

十九世紀初頭にはなお兩極地方と大陸内部は未だ若干探検を要する部分を残したが、末葉に至ると兩極地方を除けば世界の探検は一応完了した。世界の大部分は歐洲諸国家の間に分割を終り、探検も終つた時に、「果して歐人がこれらの地を如何に取扱う事が出来るか」は一八九五年八月ロンドンに開催せられた第六回万国地理学会議に提示された大問題であつた<sup>①</sup>。この問題がリブリーをして気候馴化論の研究に駆立てた最大の刺戟ではなかつたらうか。

第六回万国地理学会議は一八九五年七月二十六日より八月三日までロンドンに於いて開催された。この時の會議の模様は次の如く報ぜられる、「水曜日（七月三十一日、和田註）は熱帯アフリカに関する大討論の日であつた。出席諸会員によりて判断せられ得る限りに於いては、議事の関心は最高潮に達した。討論された問題は『熱帯アフリカが白人發展に適當とされる範圍如何』であり、このことは可

能なるあらゆる側面より攻究せられた。而してその日の後半にはゼネラル・チャップマンはアフリカ測図に関する論文を発表し、一つの決議案が提案され委員会に附託された。

続いてシルバ・ホワイト氏が *chrestographic map of Africa* に関する論文を発表した<sup>②</sup>。而してこの日の前半に行われた「白人による熱帯アフリカ開發問題」の大討論には歐洲列国の著名なアフリカに関する識者を網羅した。

アフリカ探検家として有名を馳せたかのスタンレー氏が参加せることも、又リヴィングストンを随え、ザンベジ河上流の第二回アフリカ探検（一八五八―一六三）を行い、一八八六年東阿の英獨国境測定に際し、その辣腕を以て東阿の合理的な部分を英國に獲得せしめ、後年英領東阿会社設立者となれるジョン・カーク卿が加つていることも、吾々の目を惹く。この外 *Siatin Pasha* 及び有名な *Sir Rudolf Karl von Slatin* は元埃太利軍人であるが、一八八一年埃及の *Dar Fur* 地方の知事となり *Mandi* の暴動鎮圧に際して俘虜となり、十一ヶ年間その地に留り、一八九五年一月やつと脱出の機を得た彼が同年八月に開催された本會

議に臨席していることも無視され得ない一挿話である。本地理学会議にはかくの如くあらゆる識者を集めてアフリカ問題を縦横に討論した。何故にアフリカ問題は当時かくも重視せられたのであるか。

この理解の爲にはアフリカ分割の経過に立入る必要はない。ただ歐洲列強に分割のモメントを与えたのは何かと云う点に問題が存する。それはウィーン体制が包蔵する内的矛盾に基く歐洲の幾多の動乱のうち、露土戦役後のベルリン會議(一八七八年)に至り、一応歐洲の政局妥協についたかの感を与えた。この時歐洲内部の衝突の虞れを他に転じ、自他ともに相利するを賢明なりとする考えが卓越して来たこととトルコ帝國の無力が世上に知れ亘るや、伯林會議中ここで一物も得ざりし列強に對し、スルタン領アフリカをだしに使つて賠償を与えんとする考えが現出したことであり、これらの契機に基き英仏の進出(一八八一年仏のチュニス占領、又伯林會議に於いてキプロス島のみを与えられた英の一八八二年埃及及びスエズ運河の占領)を見たことは他の列強をもアフリカの舞台に誘う因となつた。さもなけ

れば何も残らなくなるのを畏れぬ訳には行かなかつたからである。かくて十九世紀末葉までに歐洲列強の間に完全に分割を了した。當時アフリカは歐洲列強の國際危険を転嫁すべき、いわば避雷柱の据置場となつたかの觀を呈した」とはまさにアフリカのもつ時代性格であつた。然るに歐洲の「避雷柱」でなければならぬアフリカが時に歐洲という油槽に透導せられた「点火栓」たらんとすることもあつたとは云え、吾々は一例をコンゴ自由国設立の処置に見出すことが出来るように、避雷柱たらしめんとする歐洲列強の努力の跡を見ることが出来るのである。東アフリカに於けるスタンレーが一八七七年コンゴ河流域の重要な探検を終えた時に、歐洲に於いてはアフリカの眞価を解すべき何らの知識も有たなかつたに拘らず、彼は少くとも彼の発見の重要性を理解し得た一人に逢つた。それがベルギー王レオポルド二世であつた。彼は一八八二年國際コンゴ協會 Association internationale du Congo を設立したが、その協会は頭初よりその野心が科学的であると同時に政治經濟的であつたことを認めている。この協会は土民酋長と

の間に領土開發權・通商權をも獲得せる植民地契約の調印を得て、一八八四年以降レオポルド王という積極的な会頭を推戴して主權を行使せんとしたとき、この地にあつては最も重要な中阿の舟楫の便を有つコンゴ河下流並に河口の利權を繞つて仏・英・葡を刺戟したが、この時歐洲列強が意識したことは、夫々の國家がこれ以上手を出せば大變な紛糾を醸すかもしれぬという事であつた。かくて列強は外交的にこの問題を解決し、就中米独は一八八四年國際コンゴ協会の領有を承認した。これはアフリカが歐洲の「避雷柱」たるが故に「点火栓」たらしむべからざる性格を示し、而してアフリカの心臟部にあらゆる國民の商業に開放せられたコンゴ自由國設立という妥協的措施を通じ、平和的に処理せられ、かくて勢力均衡の支撐点が維持せられた好例と看做されてよいであらう。後に一九〇八年ベルギーがこれを自國植民地たるべく宣した時も、歐洲列強は却つてこの重要な地をベルギーの如き小國に与えることによりこの大陸に於ける緩衡的意義あらしめ、これによつて歐洲の勢力均衡延いては世界の勢力均衡の支撐点たらし

むることに賛意を表明したことも併せて茲に意義が深い。

然るに九〇年代に入るや道路・鐵道・電信線敷設せられ、内陸が開け始めるや、ここに新たなる強大な分割の波が起つた。英國の世界政策と仏蘭西の世界政策の衝突がフアシヨグ事件の如きを惹起したとはいへ、それは歐洲列強の勢力均衡には波及することなく解決せられ、世紀も終る頃には前提の如くアフリカ大陸は勢力均衡の上に大きな波紋を投げ懸けることもなく完全に分割せられた。

而して歐人の移住には大陸の巨大面積の中の比較的小部分が考慮されたにすぎず、爾余の巨大面積は歐洲に於ける生産に必要な資源、食料の産地として又將來の土民の購買力を予約するものとして、前章見た如く歐洲列強の金融資本主義的經營の對象として初めてその意義を發現した。アフリカ經營に対して資本輸出を唯一の手段とすることは歐洲列強間に通有性を有する事実と考えられた。従つて歐洲列強間に於ける勢力均衡はこの通有性の上に立つて考えられる事實であつた。今もしこの通有性を破つて、資本輸出を唯一の手段とせざる國民が現出したとすれば、この勢力

均衡が維持されないと推断することは首肯されてよいであろう。それはまさにアフリカが歐洲の「避雷柱」より「点火栓」への変質を意味する。こうした危惧が一八九九年リプレーをして気候馴化論研究へと駆立てたのではないかと考えるのである。

註① Ripley, op. cit., p. 531.

② The 6th International Geographical Congress, Geographical Journal, Vol. 7, 1896, p. 272.

③ Ibid.

④ 坂口昂「概観世界思潮」五六二頁

⑤ Erich Brandenburg, op. cit. 一五九頁

⑥ Fernand Mourlette: Afrique équatoriale, orientale, et australe, Géographie Universelle, Tome XII, Paris, 1933, p. 59.

⑦ Ibid., p. 60.

⑧ Erich Brandenburg, op. cit. 一六〇頁

## 結 言

吾々は気候馴化論の研究が何らかの政治経済的乃至は社会的要請に基いて行われたのではないかという前提の下に、

これらの視角から十九世紀末葉に於いて当論研究を要請したと考えられる諸事象を究明した。当論研究がかかる要請に照応して行われているところに、吾々は十九世紀末葉という一時期を劃した当論研究の目的意識の所在を確めることが出来た。吾々は研究の目的意識の歴史的究明は新しき当論研究の目的意識設定の出発点であると考える。けれどもこれは決して出発点に囚れるということを意味しない。吾々がこれらを止揚するところに初めて気候馴化論の新しい進歩が見られなければならない。

（一九四九・一一・三、稿。一九五〇・八・一三、補訂）

附記 本稿は昭和二十四年度文部省科学研究費によつて為せる

「気候馴化論研究」の一部である。

## The Background of the Acclimatization Theory

—The Object of the Theory at the End of the XIX Century—

*Toshiji Wada*

The history of the background of the acclimatization theory may be divided into three stages. In the first stage (middle of the XIX century) the term acclimatization was coined by French scholars, and theorizing and researches were developed, and the theory became an instrument of developing France's colonial policy in Algeria. The second stage with which the author deals in the present article was the closing years of the XIX century, when the followers of Malthus tried to develop the acclimatization theory with a view to solving the problem of surplus population in Europe by emigration to the African Continent. "Yellow Peril" was cried, when a menace to the balance of power among the imperialist countries was thought to be found in the progress of the Mongoloid race who are capable of acclimatizing themselves easily. Those who claimed the possibility of acclimatization of the white race became to think that the future of the balance-of-power principle depended upon the African Continent. This was due to the fact that world-wide expansion of the European race was based on the political and economic basis without taking their capacity for acclimatization into consideration. In such circumstances was taken up the study of the acclimatization theory. The third stage falls on the period after World War I, when the theory was discussed in connection with the problem of the world's capacity for supporting population as well as with the food problem.

was a failure. What was, then, the fundamental cause of the failure? The author finds it in antagonism within the empire in '71, i.e., the antagonism between Bismarck's policy on the one hand and social and economic forces associated with the Great Germany Principle as well as with provincialism supported by Catholics and others. In a word, the Germany of that period seems to have not yet become a really unified nation free from provincialism. The author is opposed to regarding Bismarck's "culture struggle" as a failure in his policy, because it was no less than an inevitable event as the result of changes in his policy in general. The author concludes that the greatness of the German statesman may be seen rather in his strategy in making his "culture strategy" terminate in a failure in appearance.